

7. 事業の広報と成果報告

(1) 情報サーバ「ほくとくネット」を通じた情報の提供と公開

北海道教育大学 特別支援教育プロジェクト
ほくとくネット

新規登録 | ログイン

HOKUTOKU ♥ NET

Contents Menu

TOP

- 特別支援教育プロジェクトについて
- プロジェクト内容
- 各キャンパスの取り組み
- アセスメント
- 発達支援ファイル・ツール
- 教材・素材
- 当事者の研究室
- トピックス
- イベント等のお知らせ
- 福祉・保健・労働
- とくしかフェ(ブログ)
- リンク集
- プロジェクト活動報告

Count

新着情報

最新 10件

エリアバレーボール	掲示板 トピックス	02/08 16:38
マット倒し	掲示板 トピックス	02/08 16:37
4年生の卒業発表(審査)会が無事に終わりました	日誌 各キャンパスの取り組み	02/05 12:34
テント内に作ったボールプール	日誌 各キャンパスの取り組み	01/28 17:10
漢字の学習方法を考える!	日誌 とくしかフェ(ブログ)	01/08 11:22
セクシャルマイノリティのサークルができました	日誌 とくしかフェ(ブログ)	12/26 07:38
札幌校の臨床スペースのクリスマスツリー	日誌 各キャンパスの取り組み	12/17 14:42
プランコ	掲示板 トピックス	12/17 13:53
ロープを使った活動環境作り	掲示板 トピックス	12/17 13:51
ふじのめ学級との共同研究を発表してきました!	日誌 とくしかフェ(ブログ)	11/30 10:43

ご挨拶

「北海道教育大学 特別支援教育プロジェクト」は、北海道教育大学5キャンパスおよび附属校の特別支援教育に関わる教員で構成されています。

特別支援教育プロジェクトでは、「特別な教育的ニーズのある子どもたちの教育支援・教育方法の開発」を行っています。

本サイト「ほくとくネット」には、閲覧者が「ホクホク得」をする特別支援教育に関わる情報や教材が掲載されています。

また順次新しい情報も掲載していく予定ですので、是非ご活用ください。

検索

キーワード

検索のタイプ オブジェ (AND検索)

Copyright (C) 2011
Hokkaido University of Education.
All Rights Reserved.
著作権に関しましては一部例外があります。
各ページの表示をご確認ください。

本事業により収集された情報や成果、プログラム内容などについては、随時、「ほくとくネット」にアップロードを行い、広く情報提供に努めている。また、講習会や研修会、講座などにおいて「ほくとくネット」を紹介するとともに学生や現場の教員などがその情報を活用しやすいよう調整を進めている。

(2) 学会等における活動報告

北海道教育大学における発達障害を含めた特別な教育的ニーズに対応した地域の取り組みについては、学会等における発表等を通して広報を行った。

北海道における地域特性に応じた情報システムの構築

発達障害の理解に関する人材育成に向けて

○安井文京・青山直二・青藤真希・萩原拓・高倉真史・小淵隆司・西部典勝子・五十嵐純央・北村博幸・藤谷一博・大山純太(北海道教育大学) 小野寺嘉史(北海道教育大学釧路大学校)
KEY WORDS: 発達障害 地域特性 情報システム / はくとくネット (www.hokutoku.net)

【目的】

精神が身体的な障害のある子どもとその保護者に対して、地域の特性に応じた教育の提供と指導できる人材の育成が求められている。とりわけへき地・小規模学校に専攻ある教員等は、広大な地域における教育ニーズに応じた専門知識の充実にサポート体制を構築する必要がある。システム構築の観点からは、情報活用を通して各々が地域の教育・福祉課題と関係の理解を深めたいという関心がある。特に障害の理解や発達障害などに特化した支援ノウハウの蓄積や情報活用が求められている。



広域の地域ニーズ

そこで北海道教育大学情報教育プロジェクトとして、開発地域に関する情報機器のシステムを構築させるとともに、調査した状況に基づき、単発型ではなく継続的な学習の場・中・高等学校と特別支援学校を結ぶ地域支援システムの構築に向けた取り組みについて報告する。

【方法】

プロジェクトの推進にあたっては、「発達支援ツール開発部門」、「人材育成部門」、開発に協力する「地域(障地・小規模)サポート部門」を構成し、開発校とともに教員の個別の困難により調査研究・実践をおこなった。収集されたデータや情報は、専用のサーバ「はくとくネット」に掲載され、随時、更新更新を行った。

【取り組みの実践】

1. 研究会の構築

北海道内各地で発達障害やインクルーシブ教育に関する情報を高めるための研究会が実施された。北海道北部の地区では「平成26年度子ども発達支援会(網走支部)」が開催され270名を超える参加者があった。(旭川地区)

2. 構築型端末を利用した学習指導の方法の検討

【発達支援方法及び検討】として「構築型端末 (iPad mini2) を活用した実践において教材の提示等、「視覚的なツール」として用いるとともに、構築型端末を活用した支援方法の検討についても実践を通して検証が進められた。実践の事後評価で、子どもの教育ニーズに合わせた活用を行い、構築型端末の活用について幅広く検証がすすめられた。(網走地区)



3. インクルーシブ子育て支援・発達障害児者の住居確保

専らスペースにて、平成26年度は毎月1回、計11回、地域の親子、延べ約300名が参加して実施された。また参加者も8回実施された。スタッフ、児童の参加のもと、地域の教育・支援ニーズに対する支援を行うとともに、実践の向上や大規模化の準備に関する基礎的な情報の収集を行った。(札幌地区)



4. アダプテッド・スポーツクラブの実施

盲人に対するスポーツ機会の高揚と、それによるスポーツ文化の振興を目的として障害児者のスポーツ支援が実施された。「楽しんでいたら書面をうけずにいい運動になっていた」という声を聞きながら活動がすすんでいった。(帯広地区)



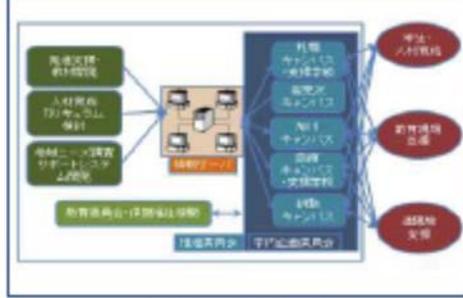
5. 道東地域の発達支援ニーズへの対応

研究会として「へき地・小規模校を越える自治体における教育前から事後ケアの充実・発達支援と地域教育機関の連携及び関係のあり方」に関する学術的調査・実践調査と地域教育機関との連携による支援事業の検討を中心に「はくとくネット」に掲載された。また研究会のさようじいキャンパスが地域の基盤を、関係機関と連携で取り進められた。(網走地区)



6. 情報システム

地域の特別支援教育に関する情報や教材、研究会やイベント情報については「はくとくネット」に掲載され、最新情報の掲載の徹底とサイトの運営が進められた。



プロジェクト全体の概念図

【考察】

北海道という広域で多様な地域特性を有する地域に対し、それぞれの地域で実施された各種支援活動について、関係サーバ「はくとくネット」を介して情報収集が行われた。システムの構築により、広域・小規模という地帯的な課題を共有することにつながった。今後に向けて、さらに構築内容の充実、ニーズに合わせた内容の構築、新しい情報の適切な掲載などを進められる。さらに道東地域の教員などに特化した支援方法の構築と支援方法に関する内容の情報提供システムの構築について、検討を進める必要がある。

補記

本取り組みは、北海道教育大学中期計画実施経費ならびに文部科学省「発達障害に関する教員等の理解啓発・専門性向上事業(教員養成プログラム開発事業)(平成27年度)」の補助を受けて実施されている。

さらに、本事業を通して得られた発達障害のある児童生徒に対する支援方法に関しても、随時各地で開催されている学会や研究会において報告を行っている。

特別支援学級におけるトランポリン運動—跳躍動作の変化に着目して—

池田千紗¹⁾ 安井友康¹⁾ 金澤恵美¹⁾ 平山一馬¹⁾ 中嶋秀一¹⁾ 松田岳大²⁾ 山本理人³⁾
 1)北海道教育大学札幌校 特別支援教育専攻
 2)北海道教育大学付属札幌小学校 特別支援学級
 3)北海道教育大学岩見沢校 芸術・スポーツ文化学科 スポーツ文化専攻

研究背景



筋緊張が低い 姿勢を保てない、疲れやすい
 バランス機能が未熟 転びやすい、粗大運動が苦手
 跳躍運動が苦手 巧緻動作が苦手

◆トランポリンを用いたアプローチ
 トランポリンは跳い場所でも手軽に実施でき、安全に楽しめる道具
 健康児と発達障害児を対象としたアプローチの効果検証

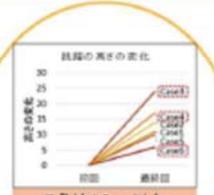
特別支援学級の体育の授業でトランポリン運動を行い、
 授業前後での跳躍動作の変化を分析した。

研究結果

跳躍の高さの変化



全員高く跳べるようになった



5名は10cm以上
跳躍が高くなった

研究方法

◆跳躍動作の分析

>データ収集
 跳躍動作は右側方からビデオ撮影し、記録
 授業の初回と最終回の跳躍動作を分析対象とした

>分析方法
 跳躍が安定してから跳躍3回分を選択
 二次元動作解析ソフトFrame-OASで分析

1)跳躍3回分の跳躍の高さの変化 2)股関節と膝関節の屈伸角の変化



◆被験児・者

特別支援学級に在籍する児童6名(男児)

Case1	1年	—
Case2	1年	77(身体C2-)
Case3	2年	65(身体C2-)
Case4	2年	58(身体C2)
Case5	4年	95(身体C3)
Case6	5年	—

—:認知機能検査未実施で不明

◆課題

競技用トランポリン上で10回跳躍を行う
 指示:なるべくトランポリンの中央で、
 手を前から上に挙げて真っ直ぐ高く跳ぶ

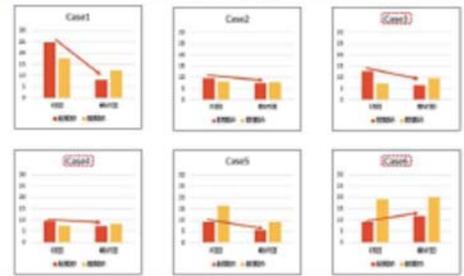
◆環境

教師がトランポリン前方から繰り返し跳び方を指示
 児童はトランポリンとその物の器械運動を自由に選択し、実施できる
 授業時数は1回45分間、週3回、4週間(計12回実施)

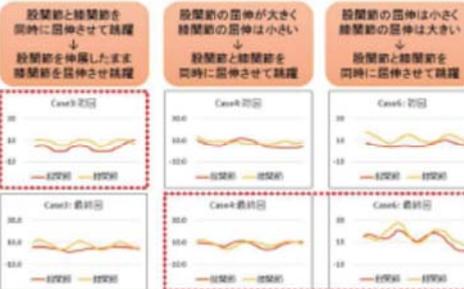
>倫理的事項

北海道教育大学札幌校倫理委員会の承認を得て実施した
 (承認番号:北教大研倫2015091003)

跳躍動作の変化



跳躍動作の経時的変化



考察



日常生活で示される運動の苦手さに関わらず
 跳躍動作が変化し、高く跳べるようになった
 ⇒効率的な跳躍方法を習得できた可能性がある

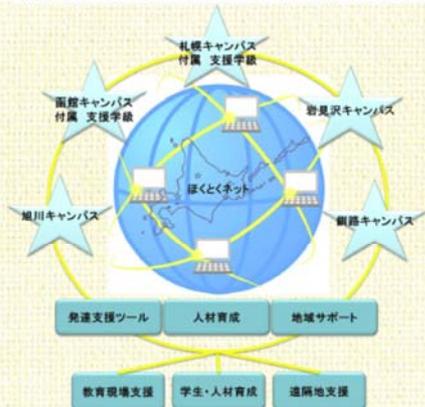
(3) 広報紙の作成

本事業に関し、理解啓発を進めることを目的に、北海道教育大学における人材育成の組織や体制の取り組み内容、平成27年度の事業成果などをまとめたパンフレットを作成し、広く広報を行うこととした。

ほくとくネット <http://hokutoku.net/>

特別な教育的ニーズのある子どもたちの教育支援・教育方法の開発

ほくとくネットは、北海道教育大学5キャンパスおよび附属校の特別支援教育に関わる教員により運営されているインターネットサイトです。教育支援で使える教材や、教育方法についての情報を発信しており、“見た人がほくほく得をする”サイトとなっています。ほくとくネットを通して、5キャンパスと附属校の教員が情報を共有し、特別支援教育プロジェクトを進めています。誰でも気軽にアクセスできて、大学や大学院での講義内容や研究内容、教育現場で明日すぐに使えるアイデアも多数ご紹介しておりますので、ぜひのぞいてみてください。



ほくとくネットは全道(全国)どこからでも、気軽にアクセスできて、“ほくほく得する”アイデアがいっぱいです。ぜひ活用してください！

□サイトマップ

特別支援教育プロジェクトについて
プロジェクトの内容
各キャンパスの取り組み
アセスメント
発達支援ファイル・ツール
教材・素材
当事者の研究室
トピックス
イベント等のお知らせ
とくしカフェ(ブログ)
リンク集
プロジェクト活動報告

□釧路校@各キャンパスの取り組み

□釧路校での取り組みや講義の様子、学生の活動について紹介しています。



教育フィールド研究の様子

□デジタル絵カード@教材・素材

□教育目的にあわせて再加工(生徒の障害特性等に合わせた色の変更等)、GIFアニメ化が自由に行えるイラストを提供しています。



□身体活動支援(札幌校)@トピックス

□障害のある子どもが利用する運動教具・遊具の利用方法を学ぶ身体活動支援臨床について紹介しています。講義で考えたレイアウトは、キッズコーナーで再現され、お子さんが実際に遊びます。



遊具のレイアウト

マットでプランコを作成

(パンフレット抜粋)

おわりに

平成 27 年度に実施された本事業における成果の概要について報告した。学部の講義では、受講生の大部分が特別支援教育についての知識がほとんどない状況であることが示された。一方、その多くが、小学校・中学校の通常学級の教諭を志望しており、通常学級に在籍する発達障害の児童生徒の理解と支援方法の伝達の重要性が示された。

通常学級に在籍する可能性の高い「発達障害の特性理解を促進するための学習プログラム」について、当事者の手記やビデオ、実際の教育相談事例などを織り交ぜるとともに幼児期、卒業後の時期にあたる青年期・成人期などのライフサイクルから見た理解促進のためのプログラムを実施した。また、体験的な学習の場としてフィールド研究を実施し、その効果について検証を行った。その結果、単に教育現場（フィールド）を体験するだけではなく、発達障害のある子どもへの個別的な支援を体験したり、講義等の座学を通じた理解の促進を図ったりすることが、「発達障害児の支援に関わりたい」という気持ちに影響していることが示唆された。また 1 年間のプログラムを通して、「各発達障害に関する理解が深まった」と自覚する者が多いことも明らかとなった。主観的理解度の範囲ではあるが、本プログラムの効果が示されたものと言えよう。

また各地域でのニーズや学生、受講生の実態に合わせた試行的な講義、学習プログラム、講習会などについても実施し、その状況と成果について報告を行った。さらに視察などを通して各地域で実施されている発達障害児・者への支援に関する情報収集を行い、平成 28 年度に向けての貴重な情報を得ることができた。

これらの取り組みについては、随時、情報を「ほくとくネット」を通じて公開することで、地域への情報の公開と提供を行ってきた。平成 27 年度末にはトップページの閲覧回数だけでも 7 万アクセスを超えるなど、広く関係者への情報提供につながっていることが伺われる。これらの情報は、へき地・遠隔地の多い北海道の地域性からくる発達障害児の支援方法や学習ニーズへの対応方法としても、有効な手段となるものと思われる。

今後の課題

本プログラムは、教員免許を取得する全ての学生が発達障害に対する基礎的な理解ができるようになることを目指し、大学全体のカリキュラム改革の一環として設定されたものである。平成 27 年度は、初年度ということもあり、受講者数は約 130 名であったが、今後のプログラム内容の充実に向けて、さらに多くの受講生のデータを集める必要がある。また、研修参加者の現場での指導経験の内容やニーズなど、多角的な視点から効果の分析を行う必要があり、事後アンケートなどを実施することで、プログラム内容について効果的な内容の精選を行う予定である。さらに、発達障害の理解を進める研修、講演とアセスメントなどの組み合わせによって、発達障害に対する実践的な支援技能を高めることができるものと考えられる。なお、平成 28 年度については、教育委員会の各支庁との連携をさらに進め、標準的なプログラムをもとに、各地域のニーズに合わせた現職教員プログラムを実施する予定である。

これらの情報から得られた内容や指導方法については、データベース化を行うとともに、テキスト等を作成することで研修用の教材を作成する予定である。また、それらのデータは、動画などを含め、「ほくとくネット」を通じて広く公開する予定である。

取り組み担当者

青山 眞二・札幌校・教授
齊藤 真善・札幌校・准教授
池田 千紗・札幌校・特任講師
千賀 愛 ・札幌校・准教授
三浦 哲 ・札幌校・教授
安井 友康・札幌校・教授
小野寺基史・教職大学院・准教授
萩原 拓 ・旭川校・教授
蔦森 英史・旭川校・講師
片桐 正敏 旭川校・准教授
二宮 信一・釧路校・准教授
小淵 隆司・釧路校・准教授
戸田 竜也・釧路校・講師
阿部 美穂子・釧路校・教授
五十嵐靖夫・函館校・教授
北村 博幸・函館校・准教授
細谷 一博・函館校・准教授
大山 祐太・岩見沢校・講師
平田新次郎・附属特別支援学校・副校長
他、附属特別支援学校教員
金澤 恵美・附属札幌小学校、中学校特別支援学級・主任
他、附属札幌小学校、中学校特別支援学級

平成 27 年度発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業
(教職員育成プログラム開発事業) 事業成果報告書
北海道教育大学特別支援教育プロジェクト報告

北海道教育大学特別支援教育プロジェクト
事務局

北海道教育大学札幌校特別支援教育 (安井研究室)

〒002-8502 札幌市北区あいの里5条3丁目1-5

電話/fax 011-778-0433

発行 平成 28年 3月 31日